

# ウニの島でウニと藻場とヒトの共存を目指して

奥尻地区藻場保全活動組織

## 地域概要

奥尻島は北海道南西部に位置する離島で、漁業と観光が盛んな町である。また、島は地下資源が豊富で、セメント業会社も複数立地している。

島の漁業は、漁船漁業ではイカ釣り漁業やホッケなどを対象とした底建網漁業の他、タコ漁業などがあり、磯根漁業では、キタムラサキウニやエゾアワビのタモ採り、ナマコの潜水漁業が盛んである。

特に西岸の青苗地区はウニの好漁場であったが、近年はウニ類の過剰な繁殖により、海藻類が減少し、磯焼け状態が続いている。このため、藻場の再生を目指して前身事業を平成19年から活用し、本事業へ移行して延べ17年目になる。



## 活動方針

当地においてウニは貴重な漁業・観光資源である。そのため、藻場保全のためにウニを駆除していくというよりは、藻場とウニと人間の経済活動が共存できるような生態系の確立を目指して、藻場保全を進めることとした。

構成員の漁業者のうち、主に活動しているのは当地で潜水器漁業を営むもので意欲のあるものである。また、女性部は後述する植林活動をもっぱら担当する。モニタリングに際しては、町役場や普及所が技術支援をしている。

## 活動実績

### (1) 流域における植林

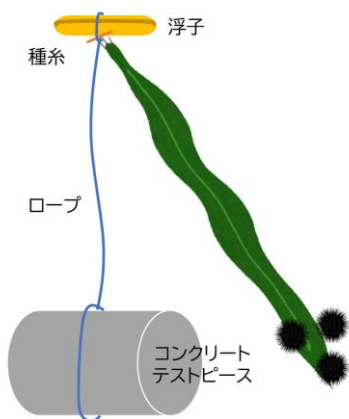
奥尻島では地元の建設会社や商工会・農協・漁協で構成される「奥尻島魚つきの森推進協議会」によって「魚つきの島・植樹祭」が開催されており、当組織もこれに連携して植樹活動を実施している。



### (2) 海藻の種苗投入

当地では地元の資源を活用した立縄式の投入種苗を自作している。

島で製造されるコンクリートのテストピースを無償で譲り受け、テストピースと浮き子をロープで結び、浮き子に種糸を挟み込むことで投入種苗としている。海藻が成長して先端が海底に接触するようになればウニの餌となり、既存の藻場への摂食



圧を分散・低減できる。この方法は活動開始時に普及所と漁業者で考案したものである。これを年間200個投入している。なお、セメント業界においても残コンなどの産業廃棄物の削減・再利用は課題となっている。

投入した海藻の繁茂はその年限りで、当座、ウニの餌になることで、磯焼け進行を食い止められている。

### (3) ウニの密度管理

磯焼け地域のウニを現存している藻場地域へ移植する密度管理を実施している。実施時期は9-10月で、24万個体目標を5日間ほどかけてSCUBA潜水にて採捕している。採捕に際しては、タモの届かない10m以深とすることで、漁業との軋轢を回避している。



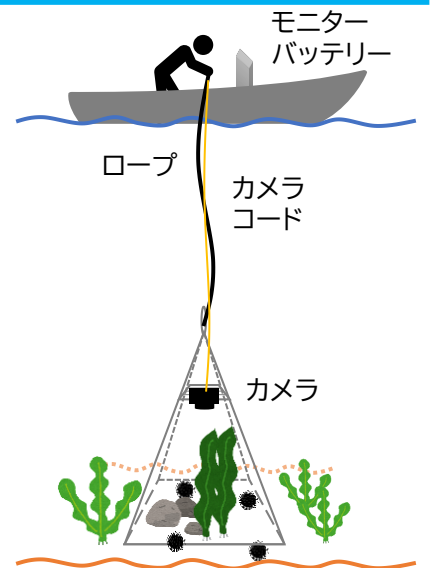
## 活動の成果と課題

### (1) モニタリングと活動の成果

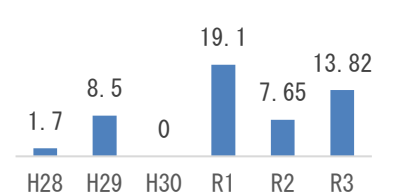
モニタリングは9-10月の秋に実施し、①2年藻のコンブが再生しているか、②新芽が生え・残っているか、といった活動の成果自体も含めて観察している。

モニタリングに際しては「目玉カメラ」を用いて被度とウニ個体数を観察している。

全体的な被度は向上しており、「海が海藻で黒くなっている」といったような現場感覚とも一致し、好調な年は活動の効果をより実感できている。ただし、藻場の繁茂具合は海水温など外部環境の影響が大きいため、慢心せず取組を継続して行くように留意している。



被度 (%) の推移 (全体)



### (2) 今後の課題

イカ釣りなど漁船漁業が主体の当地において、藻場保全活動を起点として漁業者の意識が変化したことは、本取組の大きな成果だと考えている。「いつかはイカが戻ってくる」という気質から「対策をやらないよりはやる方がよい」と漁業者に思ってもらえるようになった。顕著なものとして、青年部が主体となって海藻養殖が興った。今後はこの活動をブルーカーボンにまでつなげたい考えだ。

一方で、①活動の参加者が限定的になってしまっていること、②磯焼けの進行について、現状維持で阻止どまりになっていることが課題として挙げられる。ウニは重要な資源でもあるので、ウニ・藻場・人間との共存関係をこれからも模索していきたい。